

## 第IV部門 MMT（現代貨幣理論）支持意識の合理性・非合理性についての研究

京都大学大学院工学研究科 学生員 ○竹田 諒人  
 京都大学大学院工学研究科 学生員 田中 皓介  
 京都大学大学院工学研究科 正会員 川端 祐一郎  
 京都大学大学院工学研究科 正会員 藤井 聡

## 1. 研究背景

災害大国と称される我が国は、首都直下地震や南海トラフ地震等これからの大災害も想定されている中、インフラ整備が不十分で災害に脆弱である。インフラ整備が進まない理由として財政赤字が問題とする考え方が挙げられるが現代貨幣理論（MMT: Modern Monetary Theory）はこの考え方に異論を唱えている。この MMT の是非を問う議論は無論論理的になされるべきではあるが、MMT に対する批判の中には非合理性を排除することが困難な、すなわち不当である疑義がある批判が散見される。ついでにはその疑義を確認すべく本研究ではアンケート調査を通じて MMT の支持/反対意識の合理性を検証した結果、MMT 反対層は精緻化見込みモデルにおける「中心ルート」ではなく「周辺ルート」に基づいて、つまり MMT に対する理解なしに周囲の人々の意見に流されて MMT の評価を行っている傾向が存在することが示された。

## 2. 既往研究

本研究では MMT（現代貨幣理論）に対する批判の多くが、理論的理解に基づかない非合理的なものである可能性を指摘し、それを検証する。まず、MMT は政府が自国通貨を発行する能力に着目し、財政赤字よりも資源制約に基づく支出を重視する理論である。既往の MMT 批判は、理論に対する誤解や誤読に基づくものが多く、インフレの過小評価や財政支出の無制限性など、MMT が実際には主張していない点が批判されている。さらに、公共政策に対する支持意識に関する研究から、人々は情報不足の際に周辺の手がかりに基づいて態度を形成しやすいことが示されていた。この傾向は MMT 評価にも当てはまる可能性がある。つまり、MMT は中身の理解によってではなく、周辺の手がかりを基に批判されている可能性があるのだ。

## 3. 研究手法

本研究では、アンケート調査を通じて以下のような仮説を検証した。本研究の目的は、MMT に対する支持・反対が、MMT に対する理解に基づいてなされているのか、周囲の人の影響でなされているのかを明らかにすることである。

**仮説** MMT に批判的な人ほど、MMT に対する評価を、精緻化見込みモデルで言うところの「中心ルート」に基づいてではなく、「周辺ルート」に基づいて行っている傾向がある。

なお、この支持意識の合理性の検証するにあたり理性個人の意思決定過程を説明する説得コミュニケーション研究における代表的な社会心理学モデルである精緻化見込モデル<sup>1</sup>を用いた。「中心ルート」は論理的に考慮する過程、「周辺ルート」は感情的な反応や信頼する人といった外部手掛かりに基づいた態度変容の過程であり、今回は「周辺ルート」を周囲の人への意見に基づいた意思決定と限定した。

上記の仮説を検証するため、2025年1月にクロス・マーケティング社のインターネット調査サービスを用いた Web アンケート調査を実施した。調査対象は、MMT を「聞いたことがある」と回答した 20～69 歳の男女から 300 名を抽出した。有効回答には、すべての設問に同一回答をした被験者を除くストレートライン・カットを適用した。アンケート項目及び測定した尺度は以下に示すとおりである。（一部抜粋）

---

Ryota TAKEDA, Kosuke TANAKA, Yuichiro KAWABATA and Satoshi FUJII

Takeda.ryota.54s@st.kyoto-u.ac.jp

- MMT 反対度 : 大きいほど被験者が MMT に反対している。
- MMT 周辺反対度 : 大きいほど被験者の周囲の人が MMT に反対している。
- MMT 理解度 : 大きいほど被験者が MMT について理解している。

表 1 のように質問項目を設定し、この質問の回答値を適宜逆転処理した後の平均値をその被験者の MMT 反対度、周辺反対度とした。また MMT 理解度については 2 種類用意し、表 2、表 3 の質問、正誤問題で得られた回答平均値、正解数をそれぞれその被験者の関連語認知度、正解数とした。

表 1 MMT 反対度(Q1)・MMT 周辺反対度(Q4)

以下の項目についてあなたの考えを「全くそう思わない〜とてもそう思う」の5段階で回答してください。	
Q1	1 MMTは正しいと思う
	2 MMTは間違っていると思う
	3 日本はMMTを参考にすべきだと思う
	4 日本はMMTを決して参考にすべきではないと思う
Q4	1 あなたの周囲の人はMMTを否定する人が多い
	2 あなたの信頼する政治家はMMTを否定する人が多い
	3 あなたの信頼するコメンテーターはMMTを否定する人が多い

表 2 MMT 関連語認知度 (一部抜粋, 全 10 問)

MMTに関連する以下の用語や人名についてどれだけ知っていますか? それぞれの項目について、「知らない、聞いたことはある、簡単な説明はできる、詳しく説明できる」のうちもっとも当てはまるものを回答してください。				
項目	ランダル・レイ	租税貨幣論	統合政府	ラーナーの機能的財政論

表 3 正解数 (一部抜粋, 全 12)

Q3 以下の文の正誤を“正しい”か“誤り”か“分からない”で回答してください。	
1	MMTは、拡張的な財政政策を行ってもインフレは発生しないと主張している
2	統合政府という考え方をとった場合、通貨発行者は政府である
3	MMTは、拡張的な財政政策を常に支持するものである
4	MMTは、政府の発行する通貨は政府にとっての負債であると主張している

#### 4. 分析結果と考察

本研究で用いた MMT 反対度について、クロンバックの係数は  $\alpha=.92$  となり、高い信頼性が得られたため、本尺度の一定の信頼性と内容妥当性が確認された。

MMT 反対度を従属変数として重回帰分析を行ったところ、MMT 反対度に対して、周辺反対度と関連語認知度の係数は 1%水準で有意であることが示された (表 4)。この結果から、周囲の人々が MMT に反対していると認知している人ほど自身も反対の意見を持っていることを意味している。また、関連語を認知している人ほど MMT に対して賛成の意見を有しているということが言える。

表 4 全サンプルでの重回帰分析

MMT反対度 (n=300)	偏回帰係数	標準誤差	t値	p値
周辺反対度	0.331	0.074	4.477	<.001 **
関連語認知度	-0.345	0.066	-5.217	<.001 **
正解数	0.020	0.020	1.026	0.306
Adjusted R2	0.128			

\*\* : p<0.01, \* : p<0.05, † : p<0.10

表 6 賛成層・反対層の重回帰分析の係数の差の検定

	差のt値	p値
周辺反対度	1.836	0.068 †
関連語認知度	1.236	0.218
正解数	-0.209	0.835

\*\* : p<0.01, \* : p<0.05, † : p<0.10

表 5 賛成層・反対層それぞれの重回帰分析

MMT反対度	賛成層(n=129)				反対層(n=98)			
	偏回帰係数	標準誤差	t値	p値	偏回帰係数	標準誤差	t値	p値
周辺反対度	0.043	0.059	0.722	0.472	0.227	0.085	2.683	0.009 **
関連語認知度	-0.182	0.053	-3.406	<.001 **	-0.068	0.079	-0.860	0.392
正解数	-0.025	0.016	-1.526	0.129	-0.031	0.027	-1.172	0.244
Adjusted R2	0.089				0.058			

\*\* : p<0.01, \* : p<0.05, † : p<0.10

続いて、仮説検証のために MMT 反対度 (逆転項目を処理した Q1\_1 ~ 5 の回答平均値) の 3 未満のものを MMT 賛成層、3 より大きいものを MMT 反対層として賛成層、反対層それぞれで MMT 反対度を従属変数とする重回帰分析を行ったところ (表 5)、周辺反対度について、反対層では周辺反対度の係数が 1%水準で正で有意となったが、賛成層では有意ではなかった。関連語認知度について、賛成層ではその係数が 1%水準で負の有意であった。加えて、この重回帰分析の賛成層、反対層における係数の差の検定を行ったところ (表 6)、周辺反対度について、10%有意傾向で賛成層と反対層に差があることが示された。ただし、関連語認知度、正解数では賛成層と反対層に有意な差は見られなかった。重回帰分析の結果と合わせて、MMT 反対層が周辺ルートに基づいて MMT に対する評価を行っていることを部分的にはあるが支持する結果が得られた。

<sup>1</sup> Petty, R. E. and Cacioppo, J. T. : The elaboration likelihood model of persuasion, In L. Berkowitz(Ed.), Advances in Experimental Social Psychology, Vol. 19, New York : Academic Press, pp. 123-205, 1986.